

Newsletter 14

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第 14 号 / 2009 年 7 月 15 日発行

Contents

- 1 巻頭言 論吉的身体と生きられる混沌—だじゃれと御札とラカンの「象徴界」の外
- 2 特集 新しい学び場の創出に向けて
アカデミック・スキルズ / アカデミック・スキルズ 学生アンケート / 「アカスキ」受講者の声 / ビア・メンター
- 6 活動報告 特定研究「身体知教育を通して行う教養言語力育成」 / サイエンス・カフェ / 2009 年度日吉キャンパス公開講座 / 2009 年度日吉キャンパス春期公開講座
講師の声 / 日吉行事企画委員会 (HAPP) 春学期の活動
- 8 ニュースフラッシュ 庄内セミナー 参加者募集のお知らせ / 基盤研究 カリキュラム研究 / 声プロジェクト
夏季実験授業 / コミュニケーション・ラウンジ / 2009 年度「教養研究センター選書」募集のお知らせ / 教員サポート
- 8 事務局だより



Foreword



論吉的身体と生きられる混沌 だじゃれと御札とラカンの「象徴界」の外

教養研究センター副所長
武藤浩史 (法学部)
Hiroshi Muto

「教養とは混沌に耐える力だ」(種村和史)

お笑いにこだわっている。本気でグローバル化をめざすのであれば、抽象的なきれいな事はもういいから、具体的な行動を起こさなくては。国際会議や学会で場をなごませるためにジョークが言えるような全人的な教育を始めなくては。日本を大阪化する? ラテン化する? それもいいけれども、私の夢は慶應義塾のお笑い感覚をイギリス化することである。彼らのあのおバカなユーモアのセンスがなければ、ビートルズだってあんなに楽しくはなかった。ジョン・レノンはピーター・セラーズを愛した。慶應義塾大学がオックスブリッジに敵わない点として、一流コメディアン輩出数がある。

そこで、だじゃれの話。「ウルトラマン、電話だよ」

——「ジュワッキ」

受話器とシュワッチが繋がることで意味の支配が断ち切れ、通常は意味生成のための召使役を演じる音声そのくびきから解放されて主人となり言語的意味と秩序の破壊が起こると、聞き手は腹を抱えて笑う。体が反応してしまう。

ジャック・ラカンならば、言語に支配される秩序すなわち「象徴界」から解放されたのだと精神分析の見地から説明するであろう。そして、「象徴界」から解き放たれると、

世界が名のない動きであること、うごめいていること、そのうごめきの中にわれわれの身体が放りこまれていることが分かる。それは「現実界」、生きられる混沌と呼んでもいい。

『福翁自伝』に、福澤諭吉 12、3 歳の頃の有名なエピソードがある。幼少の諭吉はやんちゃだった。人名を書いた紙を踏むと、真面目な兄に怒られた。そこで、何くそとあって、神様の名が書いてある御札を踏んでみた。便所でも使ってみた。何も起きなかった。次に、稲荷の社のご神体の石を取り出して、代わりの石を入れてみた。他の稲荷の社のご神体である木の札を取り出しておいた。何も起きなかった。

これは子どもの悪戯というだけの問題ではない。決定的な体験だった。その時、彼は「象徴界」の外に出たからである。名にも神にも、すなわち言語にも社会秩序にも根拠がないことを見てとったのである。見てとったばかりではない。尻を御札の紙で拭くことによって、自分の体を通して象徴界の外を知ったのである。彼の大きさはここに発する。それは、年頭の福澤諭吉展でも焦点を当てられた彼の「あゆみだす身体」に繋がってゆく。象徴界の外側に出て生ける宇宙と直接繋がることを経験した幼少期からの身体感覚があったからこそ、彼は社会の先導者となった。秩序の外に出て、生きられる混沌から直接得たエネルギーで、激動期に内向きになっていた日本社会を再活性化することができた。

諭吉をお札という御札の中に閉じこめるなよ。笑いを通して「象徴界」の外に出てうごめいてやまない混沌の世界を楽しみ、論吉的身体を学んでひと暴れしようぜ。



新しい学び場の創出に向けて

教養研究センター所長
横山千晶（法学部）

Chiaki Yokoyama

学生は勉強で困ったことがあったときに教員や友だち以外、どこに相談しに行くのでしょうか。学習の基本的な問題についてさえも学生はどこに相談しに行ったらよいかわからないために、同じ質問でありながら異なった学生が、さまざまな場所に聞きに行っていることが慶應義塾大学での実情です。ある者は図書館へ行き、ある者はITC、学事担当部署、学生相談の窓口である学生総合センターなど、実にばらばらです。

なぜでしょうか。学生は自分の躓いている実際の箇所がいったい何なのかすらわかっていないことが多いですし、教員のアドバイスを適当でない場合もあります。単なる理解力の問題ではなく、精神的悩みや学習障害が学習に影響していることもあるでしょう。また、実際には教員がひとりですべての学生の多様な悩みや問題に応えられるわけでもありません。

そのためには**さまざまな組織や人をつなげた「学びの場」の構築**が必要となります。つまり、教員、学生、図書館、学生総合センター、学事担当部署、ITC、他キャンパス、および各研究センターの研究者が協力して学びの場と生活の場としての大学環境を考えることで、それぞれのリソースを活かしながら、学生がどの場所に質問に来ても、各部署が協力し合って個別の問題に対応できるようにするシステムの創出です。その第一歩として教養研究センターは日吉メディアセンター（図書館）と連携して、去年から学習支援のあり方を考えています。図書館は集い、調べ、発見し、話し合う、すべての機能を持っているからです。

そのための最初の試みが「学習相談アワー」の開始です。学生は仲間同士で助け合うことで、効率よく学ぶことができます。上から下への一方通行ではなく、横の学びあいのシステムはまた、半学半教のシステムでもあります。よりスキルのあるものがそのスキルを使いつつ教えることで、共に学びに磨きをかけていく方法です。教養研究センターは2008年の秋に大学院生の学習相談者に日吉メディアセンターのレファレンス・カウンターに座ってもらうことで、学生の具体的な相談を受け、各自の躓きについてカルテを取ってきました。その結果、年齢の近い学習相談者に対してのほうが学生たちもアプローチしやすいということ、また、相談内容にはいくつかの共通点があることがわかりました。

2009年度はこの実績に基づき教養研究センター設置の「アカデミック・スキルズ」既修者の中で成績優秀な修了者を5名選び、

去年も学習相談者としてレファレンス・カウンターで相談に当たってくれた慶應義塾大学大学院文学研究科の間篠剛留君と図書館員の指導を経て、本格的に学習相談を開始しました。5名のピア・メンターはいずれもそれぞれの学部からの通学生です。また、専門職員や大学院生だけではなく、質問内容によっては現在アカデミック・スキルズを担当している教員グループが相談のサポートにまわるなど、サポートシステムも充実させています。6月8日（月）に始まったこのプログラムは、春学期は月曜日から金曜日の毎日、7月10日（金）まで、13時から18時の間に相談を受け付けます。

まだ始まったばかりのプログラムですが、このようなアドバイザーやピア・メンターとしての学生の導入は、トレーニングプログラムの充実とカルテの構築を経て、大きな学習支援効果を上げることはまず間違いありません。また教員・専門職員のみならず大学院生や学部上級生を結んだ学習支援システムは全国的に見ても新しい取り組みですので、**慶應義塾がひとつのモデル**となっていくことが期待されます（詳細は5頁を参照）。

めざすのは学習支援のみではありません。これから考えていくべきことは以下のふたつです。まずゆくゆくは各部署とのネットワークを強化することで、さまざまな学生の悩みに迅速に対応できる柔軟性が次のステップです。大学の各部署が協力して一人ひとりの学生をはぐくみ、見守っていくシステムの構築は、学生の大学への帰属意識、つまり大学を支え支えられているという意識を強めていく大きな土台となります。そしてこのシステムはこれだけでは終わりません。今度はそうやって見守られた学生たちが自分の仲間たちを大学と協力して助けていくことにもつながります。長い目で見れば、このシステムは社会に出て行った塾生たちとの協力にも発展することでしょう。

次に考えるべきことはまさに上で挙げた外との連携です。学生の居場所、学び場はキャンパスだけではなく。クラブ活動、地域社会での課外活動、アルバイト先、IT環境など、実に多彩です。これらの「居場所」を大学につなげつつ、協働のもとでより広い視点に立った「学びの場」を考えていくことも教養研究センターの目標地点です。そのために学習相談のみならず、さまざまなプロジェクトが現在進行中です。これからの発信にご期待ください。そして、新しい学びの場の創出にひとりでも多くの皆様方のご協力をお待ちしています。

Article—①

アカデミック・スキルズ

2008年度のアカデミック・スキルズは、基礎編『アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ』3クラス、中級編『アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ』1クラスの4クラスから成る、バランスのよい編成でしたが、そのなかにも伝統と革新のふたつの側面が垣間見られる、画期的な一年間でした。伝統というほどアカデミック・スキルズは長い歴史をもっている訳ではない、と反論される方もいらっしゃるかもしれませんが、授業の形式としては、すでに完成の域に達しています。

基礎編に話を絞りますと、春学期には、メディアセンターとのコラボレーションによって、研究テーマのリサーチ方法を学習し、先行研究を視野に入れた上で、独自のリサーチを行い、そこから独自の論理構成を導き出し、それを論文にまとめます。もちろんこの段階で、大きな成果を望むことはできません。しかし、一年間のターニング・ポイントを迎える段階でこれだけの仕事ができれば十分です。秋学期は、春学期に習得した技術を、プレゼンテーションにも生かしていく段階に相当します。論文を作成していく際に学習するリサーチ力と論理的な思考能力は、アカデミックなプレゼンテーションの技術を習得していく際の支えになります。論文からプレゼンテーションへという流れは、基礎編『アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ』の伝統といえるでしょう。2008年度の3クラスのうち、月曜日クラス（担当：佐藤元状、津田真弓、吉田恭子）と水曜日クラス（担当：磯崎敦仁、篠原俊吾、横山千晶）は、この伝統を踏襲しました。それに対して、木曜日クラス（担当：新井和広、佐藤望、徳永聡子）は、春学期からディベートを授業に取り入れる革新的な試みを行いました。論理的な思考能力を、ディベートによって培い、それを論文の作成に応用していくという新しいモデルといえます。

革新という意味では、中級編『アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ』（担当：佐藤元状、武藤浩史、横山千晶）も興味深い実験を行いました。「人文学的知を究める——知の在り方、文学の読み方、歴史の見方の徹底指導」という副題の下、人文科学研究の真髄であるテキストの精読の特訓を行い、事物の表層の奥にある複雑で深遠なものを考察しようとする勇気と力を養いました。

伝統という角度から話を続けると、毎年恒例のプレゼンテーション・コンペティションは、一年間を締めくくる大切なイベントとなっています。2008年度も、2009年2月6日、来往舎のシンポジウム・スペースにて、本授業のスポンサーである極東証券株式会社、菊池廣之社長をはじめ、塾内外から多数の観客

を迎え、各クラスの代表者、合計8名のプレゼンテーションが行われました。白熱した口頭発表と緊張感のある質疑応答は、冬の日吉の風物詩となりつつあります。

最後に、ふたつの革新という視点から、本報告を締めくくりたいと思います。ひとつはアカデミック・スキルズの学生論文集のリニューアルです。これまでも学生論文集は作られてきました。しかし、2007年度以降、学生主体の編集委員会が編成され、慶應義塾大学出版会の小磯勝人氏にもご協力いただき、学会誌・紀要顔負けのフレッシュな学生論文集が作成されていることは強調しておきたいと思います。今後、ブックガイドなどを含んだこの革新的な論文集が、メディアセンターでもお手本として使用され、塾内外に旋風を吹き込んでいくことを願ってやみません。もうひとつは、ピア・メンター制度の拡充です。これまでも、アカデミック・スキルズの既習者が授業にピア・メンターとして参加し、授業を活性化する役割を担ってきましたが、現在、ピア・メンターを教室の外に、まずはメディアセンターに派遣し、アカデミック・スキルズで培ったさまざまな知の技法を塾生全般へ伝達し、その輪を広げていく計画を進行しています。2009年度がアカデミック・スキルズのさらなる飛躍の一年となりますように。

（佐藤元状）

Article—②

アカデミック・スキルズ 学生アンケート

2008年度末に行ったアンケート調査「アカデミック・スキルズのアンケートのお願い」の結果を報告し、その内容を分析してみます。質問項目は、以下の7項目です。

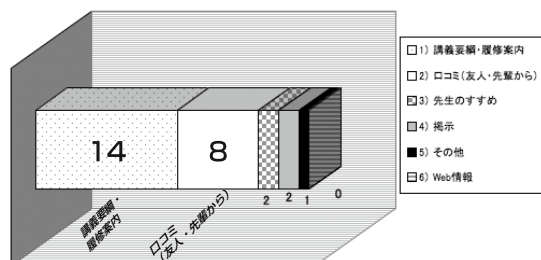
- ①アカデミック・スキルズをどこで知りましたか（複数回答可）。
- ②アカデミック・スキルズを履修したのはなぜですか。
- ③アカデミック・スキルズを履修して大変だったことがあれば自由に書いてください。
- ④アカデミック・スキルズを履修してよかったこと、体得できたことがあれば自由に書いてください。
- ⑤アカデミック・スキルズを友人・後輩に勧めますか。
- ⑥アカデミック・スキルズを勧める方、後輩に一言アドバイス、お願いします。
- ⑦英語版アカデミック・スキルズがあれば、履修したいですか。

アンケートの回答数は22名、学部・学年の配分は、法学部10名、経済学部3名、商学部2名、文学部6名、理工学部1名、1年生10名、2年生9名、3年生1名、4年生2

名でした。

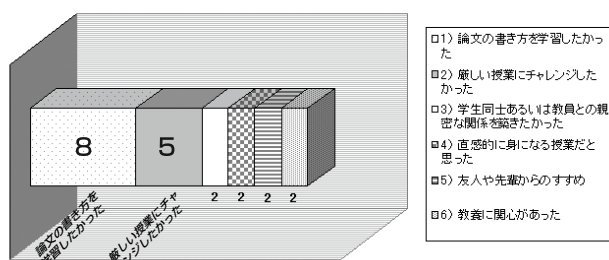
①の回答は、1) 講義要綱・履修案内=14名、2) 口コミ(友人・先輩から)=8名、3) 先生のすすめ=2名、4) 掲示=2名、5) その他=1名、6) Web情報=0名となっており、講義要綱・履修案内と口コミが大半を占めています(図1)。

図1 アカデミック・スキルズをどこで知りましたか
(複数回答可、単位:名)



②の回答を整理すると、1) 論文の書き方を学習したかった=8名、2) 厳しい授業にチャレンジしたかった=5名、3) 学生同士あるいは教員との親密な関係を築きたかった=2名、4) 直感的に身になる授業だと思った=2名、5) 友人や先輩からのすすめ=2名、6) 教養に関心があった=2名、になります(図2)。

図2 アカデミック・スキルズを履修したのはなぜですか
(単位:名)



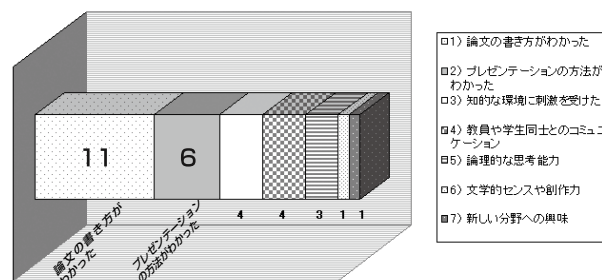
1)と2)が過半数を占めることから、学生が学業全般に対して、高い目的意識をもって授業を履修していたことがわかります。

③の回答を整理すると、1) 期日を守って課題を定期的に提出すること=11名、2) 学期末論文の作成=8名(内訳:テーマ設定の困難=3名、リサーチの困難=3名、論文作成の困難=2名)、3) すべて大変=1名、4) 困難は感じなかった=1名、となります。ほぼ毎週の課題と学期末論文の作成が、学生の大きな壁として立ちはだかっていたことを物語っています。

④の回答をまとめると、1) 論文の書き方がわかった=11名、2) プレゼンテーションの方法がわかった=6名、3) 知的な環境に刺激を受けた=4名、4) 教員や学生同士とのコミュニケーション=4名、5) 論理的な思考能力=3名、6) 文学的センスや創作力=1名、7) 新しい分野への興味=1名、になります(図3)。

1)と2)から、論文の書き方とプレゼンテーションの方法と

図3 アカデミック・スキルズを履修してよかったこと、
体得できたこと(複数回答可、単位:名)



いう二つのスキルの学習に満足感を覚えていることがわかります。

また3)と4)は少人数クラスの魅力を表しています。

⑤に関しては、勧める=20名、勧めない=2名となっています。学生の圧倒的な支持を受けていることがわかります。①の回答の口コミと考え合わせると、アカデミック・スキルズが伝統となりつつあることが実感されます。

⑥の回答をまとめると、1) きついけれど、やりがいがある=14名、2) 人生が変わる=2名、3) 教員とのふれあいに感動=2名、となっています。1)にすべてが要約されているといえるでしょう。

⑦に関しては、1) 是非とも履修したい=3名、2) できれば履修したい=9名、3) あまり関心がない=3名、4) 履修したいとは思わない=4名、5) その他=3名、となっています。英語版の導入に関しては、学生の意見は二分されているような印象を受けます。導入を具体的に検討していく際には、2)の意見の学生を取り込むためにも、英語と日本語を両方使用するという折衷案も検討してよいと思います。3)と4)の数の多さは、学生の英語運用に対する不安を物語っているからです。

以上、アンケート結果を紹介してきましたが、その内容はアカデミック・スキルズを教えている教員がクラスの中で感じる手ごたえと呼応しています。問題意識が高く、やる気のある学生との1年間の格闘の成果を彼らのアンケートに見出すことができ、安心するとともに、教員としてのさらなるコミットの必要性を感じました。

(佐藤元状)



2008年度アカデミック・スキルズ
プレゼンテーション・コンペティション

Article—③

「アカスキ」受講者の声

気がつけば、アカデミック・スキルズの授業との関わりも4年目になりました。下手をすれば担当教員の先生方より古株になってしまいました。今までの授業を振り返りつつ、この授業の魅力をお伝えできたらと思います。

わたくしが、この授業を初めて履修したのは学部2年次のこととなります。驚いたのは、英文学・フランス文学・中国政治というまったく異なる分野の先生が3人もおり、履修者たちで侃々諤々の議論をしながら授業が進んでいくということでした。このクラスで書いた英文学の論文がきっかけでイギリスに留学し、大学院で英文学を専攻することになったのですから、人生とは不可思議なものです。ポディーブローのように、ジワジワとその学生の進路や学生生活に影響を与えていく、それがアカスキの授業の「魔力」といったところでしょうか。（若澤佑典）

私は日吉キャンパス在籍期間中の2年間、アカデミック・スキルズを受講していました。1年次、2年次ともに「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」という応用クラスに所属していました。1年次のテーマは「地域と歴史研究」で、各地域の歴史を相対化することで、その地域が持つ社会像の揺らぎなどを探究しました。2年次は「人文科学を究める」で、精神分析などを用いながら、人間性の本質を探究しました。テーマは多岐に渡りましたが、私が授業から得られたのは各分野の単なる知識の集積ではありません。人の頭ではなく、自分の頭をフル回転させて、自分の意見を作り出す知的鍛錬です。自分が得た知識・感覚を、論理的に組み立てていき、最終的には人に伝えるという基本的なプロセスを何度も繰り返しました。主に文学・芸術論を中心に研究しましたが、このとき得られた知的鍛錬は、現在の経済学部での研究においても非常に有益なものになっていると思います。（大久保知直）



Article—④

ピア・メンター

「頑張っているのに、レポートがどうしてもうまく書けない」「文献はどうやって調べればいいのか?」「そもそもレポートって何?」日吉メディアセンターのレファレンス・カウンターには、毎日いろいろな相談をしに学生たちがやってきます。このような学生たちに、情報のプロの立場から図書館員が答えることはもちろん大切ですが、同じような疑問や悩みを抱えて悪戦苦闘しながらレポート作成に取り組んだ経験を持つ、あるいは今現在も試行錯誤を続けながら学習研究を継続している同世代の学生たちが、経験に裏打ちされたアドバイスをすることは大きな助けになるはずです。また、相談に乗る側の学生にとっても、同世代の学生の学習相談に乗ることは、自分の経験やスキルを見直し、欠けているものを補い、持っているものにさらに磨きをかけるよいきっかけとなります。相談員同士で知識を共有しあったり、情報のプロの技を学んだりすることもできるでしょう。

教養研究センターは日吉メディアセンターと共催で「学生のための学習環境を整える」プロジェクトに取り組んできました。その一環として、本年度「日吉学習相談アワー」を開催します。春学期は6月から7月にかけて、秋学期は11月から1月にかけて、アカデミック・スキルズ修了生の有志諸君が学習相談員として、日吉メディアセンターのレファレンス・カウンターに座り、学生からのレポート作成に関する相談に乗ります。受け付けた相談とそれに対する答えはカルテとして残し、学生たちが学習上どのような困難に遭遇しているのか、それに対してどのような援助が可能なのかを考えていくための資料として役立てたいと思います。この取り組みによって、大学の学習環境をよりよいものに整備していくとともに、大学で学習・研究を進めていくための様々な知識とスキルを互いに伝承しあい交換し合える、学生自身のための学生自身によるプラトホームが形成されることを期待しています。（種村和史）



特定研究「身体知教育を通して行う教養言語力育成」

当センターの大型研究である文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」プロジェクトが2007年度に終了したことを受けて、2008年度は特定研究の新たなテーマを決定しました。

2008年10月に、新たな特定研究のためのワーキンググループを設置し、議論・検討を行った結果、当センターでこれまでに教育実績のある身体知教育（「体をひらく、心をひらく」）、言語教育（「アカデミック・スキルズ」ライティング指導）、身体知的言語教育（未来先導基金「声プロジェクト」の芸術系実験授業）を有機的に組み合わせて、外国語に特化しないタイプの中上級「語力」教育を進めるプロジェクトを、当センターの次期特定研究とすることが決定され、コーディネートオフィス会議で諒承されました。体験・参加型の教育を行いさまざまな気づきを促す身体知教育の方法を用いて高いレベルの言語教育を目指すという、これまでの当センターの活動実績を礎としながら、それをさらに大胆に展開する先進的な試みとなります。

このプロジェクトはまた、本大学学則第1条に「本大学は・・・広く社会の先導者を育成する」とある慶應義塾大学創業の精神に則り、リーダーシップ教育を合わせて行うものでもあります。そのために、創造力と協働力、自己システム知と社会システム知をバランスよく発達させながら言語教育を行ってゆくという側面もあります。

体験のタイプを、「芸術」、「フィールドアクティビティ」、「コミュニティ」、「コミュニケーション」の4つに分類して、それぞれに1つずつセクションを設け、さらに「発信・評価・システムデザイン」を行うセクションを作って、計5つのセクションとするところまでは大枠が決められました。

今後、さらに議論および活動を進めて、本特定研究を本格的に展開していく予定です。

（武藤浩史）

サイエンス・カフェ

飲み物を片手に、気軽なスタイルでサイエンス談義に混じることのできるカフェ、日吉キャンパス来往舎の「サイエンス・カフェ」は、2007年初夏に開店してから、およそ2ヶ月に1度のペースで着実に開催されています。こちらの期待通りに子供のお客様も多く、（普通の大学の講義では残念ながら期待できないような）活発な質疑応答があります。話し手にとっては「子供にもわかるような話し方」を工夫する良い機会であり、また思いもかけない質問を受ける貴重な体験の場となっています。このカフェの活動によって、大学で行われている研究活動が少しでも社会に還元され、特に次代を担う若い伸びやかな頭脳にとって面白い時間空間となることを期待しています。「通りがかりにちょっと寄ってみたいカフェ」であることを目指して、第10回までは事前申し込み不要としましたが、第11回からは準備の都合上、なるべく事前の連絡をお願いすることにしました。ただし定員は明示せず、当日参加可能な自由な雰囲気を残しています。2009年に入ってからテーマと参加人数は下記の通りです。第10回「天気のお話——いろんな雲を作ってみよう！」杉本憲彦（法・物理）1月24日：31名。第11回「サンゴは謎のかた

まりっ！」服田昌之（お茶の水女子大・生物学）3月21日：53名。第12回「夜の森のにぎわい——野ねずみ達のくらし——」坂本信介（総研大・葉山／首都大・動物生態）5月30日：52名。

【次回予告】第13回は7月18日午後2時から「家族で暮らすハチの話」お話は片田真一さん（経・生物）です。皆さんのご来店をお待ちしております。

（鈴木 忠）



2009 年度日吉キャンパス公開講座

春期公開講座では、講義形式で行われた 2008 年度秋期公開講座「記録・記憶と構想の現場」からテーマを引き継ぎ、少人数による演習形式の 5 講座各 4 回を開講しました（詳細は「講師の声」参照）。シニア層の社会人が中心となる履修者に、少数限定で日吉キャンパス所属の学部生を加えることにより、刺激的な講座となりました。

秋学期公開講座「天からの文（ふみ）を読み解いてみよう——世界天文年に因んで——」は、9 月下旬より 12 月初旬までの土曜日に、10 日間計 20 コマのオムニバス講義として開講されます。その約半数にて天文学、宇宙開発など自然科学分野を扱い、残る半数にて芸術分野などにおける天文学の影響を取り上げる予定です。（坂本 光）

2009 年度日吉キャンパス春期公開講座講師の声

昨年に引き続き日吉キャンパス〔春期〕公開講座が開かれました。今年は講座数が 2 つ増え、計 5 つとなりました。「見て・感じて・動いて味わうシェイクスピア」（法学部横山千晶）、「絵画を聞く、音楽を見る、自我の行方」（商学部フィリップ・コミネティ）、「ゲーテの『ファウスト』第 1 部を読む」（経済学部山本賀代）、「創造する自己」（大学院システムデザインマネジメント研究科前野隆司、法学部武藤浩史）、「メディア・リテラシー入門」（教養研究センター坂倉杏介、法学部佐藤元状）です。それぞれ 5 月から 6 月にかけての土曜日に 2 時間の長さで 4 回開かれ、少人数参加型の授業を展開し、活況を呈しました。

前野隆司と筆者が担当した講座は「創造する自己」と題された理系教員（前野）と文系教員（武藤）の合同授業で、それぞれの視点から「自己」と「創造」の問題に講義とワークショップを組み合わせて取り組んだ後で、受講生も含めた対話を試みました。

第 1 回（5 月 9 日）は前野が理系の立場から自己と意識の関係について自らの「受動意識仮説」を語り、第 2 回（5 月 16 日）は武藤が朝吹亮二の詩「たわしのわたし」をテキストとして、前野の「受動意識仮説」に繋がる読解を披露しました。第 3 回（5 月 23 日）は前野が創造力について講義とワークショップを行うとともに、最後に武藤が身体ワークショップを行い、最終回の創作に向けて頭と心と体を解放しました。最終回（6 月 6 日）は、両講師も含めた参加者全員の創作発表となり、多彩な作品が読み上げられ演じられ議論されて大いに盛り上がりしました。「自己」は「創造」の行為によって作られてゆくものであることが体感され、開かれた姿勢で臨む文系と理系の交流の豊かな可能性が発見されました。（武藤浩史）

日吉行事企画委員会（HAPP）春学期の活動

日吉行事企画委員会（HAPP）の春学期の活動についてご紹介します。この委員会では、①新入生歓迎セッションと②公募企画セッションを二本の柱と定めて行事を企画・開催しています。

新入生歓迎セッションは、一流の演者を招いて実施する依頼型のプロジェクトです。

公募企画セッションは、主として秋学期に行う公募型のプロジェクトです。場所は全て日吉キャンパスです。全ての企画は、教職員、全塾生、地域に開かれています。お誘いあわせておこしください。なお、秋学期の公募を始めました。多くの方の応募をお待ちしています。詳しくはホームページをご覧ください（<http://happ.hc.keio.ac.jp/>）。

（小菅隼人）

NO.	企画名	日程
1	ギターに生きる一坂場圭介を聴く 演奏者本人のトークを交えたギター演奏	5 月 21 日（木）
2	台湾映画『九月に降る風』上映・講演会 台湾映画の上映・講演会	5 月 27 日（水）
3	演奏会シリーズ「啓蒙主義と音楽」連続演奏会 第 1 回 講演会・対談「フランス・ロマン主義の再発見—アルカンのピアノ音楽を中心に」 第 2 回 「啓蒙主義からロマン主義へ」：寺嶋陸也ピアノ・リサイタル 第 3 回 「転換期のチェンバロ音楽」：広沢麻美チェンバロ演奏会 第 4 回 「啓蒙主義時代の音楽」：慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会	第 1 回 6 月 8 日（月） 第 2 回 6 月 15 日（月） 第 3 回 7 月 3 日（金） 第 4 回 7 月 15 日（水）
4	環境週間。パネルディスカッションや展示講演会などのイベントを開催し環境問題への関心を喚起する	6 月 22 日（月）～ 27 日（土）
5	土のいのち～泥だんごと左官の技。泥だんご制作ワークショップと左官による土の造作技術実演付き講演会	7 月 4 日（土）
6	OTO（おと）の会新作コンサートシリーズ No.11「来住舎 秋・空・響：Part2」 ダンサーを交えた邦楽と洋楽の演奏会	10 月 3 日（土）
7	塾長と日吉の森を歩こう 塾長と学生がともに日吉の森を散策	未定

庄内セミナー 参加者募集のお知らせ

『庄内に学ぶ「生命」——心と体と頭と——』を総合テーマとして、今年度は「激動の時代を生き抜く——松ヶ岡開墾場に学ぶ「生命」のつながり」をテーマに、地元自治体・経済団体などの協力のもとに開催されます。プレ企画としては下記の日程で、アカデミー賞受賞作品映画「おくりびと」の上映会と講演会を行います。詳しくは下記の URL をご覧ください。

プレ企画：8月1日（土）来往舎シンポジウムスペース

14:20～16:30 映画「おくりびと」上映会

16:45～18:00 講演会「山形庄内地方の魅力（仮題）」

講演者 宇生雅明氏（庄内映画村株式会社 社長）

庄内セミナー：8月31日（月）～9月3日（木）

<http://keio-up.net/shseminar/> （日水邦昭）

基盤研究 カリキュラム研究

他大学のカリキュラムの動向には私たちは神経を尖らせますが、慶應義塾内で展開している新しい試みには意外に相互間の知識が不足しているのが現状です。その事実が本研究で明らかになっています。今回刊行の報告書『2007～2008年度基盤研究報告書慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②』では、こうした内部の情報を収集して別の角度から内部の現状をみつめ、原点に戻ってカリキュラムの現状の把握と新たな提言を行っています。今後の展望という視点から、ぜひお読みいただきたいと思います。（伊藤行雄）

声プロジェクト夏季実験授業

慶應義塾未来先端基金採択事業として2007年夏から始められた文学の実験授業が今年も8月10日から15日の6日間実施されます。今年のオーガナイザーである佐藤元状さん（法学部）はノーベル賞作家J・M・クッツェーの代表作『恥辱』と『動物のいのち』を取り上げ、頭と体を使った参加型の授業を通して皆で一緒に、クッツェーが投げかける人間および動物の＜身体性＞をめぐる切実な問いに創造／想像的に応答します。（武藤浩史）

コミュニケーション・ラウンジ（2009年4月OPEN）

既存の枠組みにとらわれない自由な発想の場として、和室「日吉の家」やラウンジ、留学支援のインフォメーションスペース、世界との遠隔会議も可能なスタジオなどの新空間が第四校舎独立館地下1階にオープンしました。和室には「ちゃぶ台」があります。上座下座の区別のない「円卓会議」が可能です。ディスカッションなどに大いにご利用ください。学外への貸し出しは秋より予定しています。

現在予約のない時間帯は自由な利用が可能ですので、いつも学生で賑わう一角です。利用時間は原則平日の授業時間帯、予約やお問い合わせは hy-lounge@adst.keio.ac.jp へどうぞ。（不破有理）



2009年度「教養研究センター選書」募集のお知らせ

この企画は、当センター所属の研究者が学生や一般読者に先端的な研究成果を発信し新鮮な知の一石を投じることによって、研究・教育相互の活性化をめざすことを目的とします。先行研究を踏まえ、読者の指針となる書誌情報を盛り込んでください。事前申し込みの締切は2009年7月31日（金）（表題と目次などによる著作概要）、原稿提出の締切は9月25日（金）です。原稿の長さは40,000字程度です。詳しくは toiawase-lib@adst.keio.ac.jp へどうぞ。（不破有理）

教員サポート

7月1日（水）、メディアセンターとの共催で「メディアセンター・サービス活用術——少人数セミナー授業での実践ワークショップ——」が開催されました。今回は、「パワーアップ編」と銘打って、講師の島田貴史さんから実際に課題が出題され、参加者はそれに取り組みながら、メディアセンターの各種サービスを実地に学びました。日ごろ指導している学生の立場になることで、彼らの直面する困難を実感することができました。（種村和史）

事務局だより

4月1日に教養研究センターに異動して参りました山口です。約8年ぶりの日吉キャンパスは、教養研究センターの活動の拠点である来往舎が竣工し、網島街道沿いには協生館・独立館が建ち上がり、力強い日吉キャンパスの発展を感じました。

センターの活動に実際に参加させていただき、2002年のセンター発足以来、バックボーンとして引き継がれてきた、座学のみであってはいけないという、「身体知」の伝統に刮目せずにはいられませんでした。センターでは、「知」の伝統を踏襲しつつ、今年度も新たにいくつかの展開をはかる、と伺っています。ひとつには、独立館地下1階コミュニケーションラウンジを「日吉の家」とすべく、新たな活動を開始。また、メディアセンターと協働し、同センター内でピア・メンター制度を導入。そして、横浜市との「横浜寿町」における積極的な地域コミュニティ活動への取り組み、などです。

最後になりますが、所長・副所長を始めとする諸先生方のご指導のもと、事務室の皆様と一っしょに、センターの活動の一端を担えればと思います。

よろしく願いいたします。（山口 中）



Newsletter
2009. July No.14

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts）

発行日：2009年7月15日 代表：横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL:045-563-1111（代表） Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp>